

## 犬語のはなし

ほそやまこと

家内が犬を欲しいと云いだした。困ったことになったと思った。だいたいあの手の動物は手間がかかる。出費も馬鹿にならない。うっかり飼いはじめたら旅行にも出かけられない。何とか思いとどまらせようとしたが譲らない。

云いだしたその翌日には犬の雑誌を何冊か買ってきて、あの犬が良い、この犬が可愛いなどと騒ぎはじめ、やがて、ボクの前に座ると一冊の雑誌を開いて見せた。

気の進まないまま覗いてみると、そこには立派な犬の写真が載っていて、紹介記事にはミニチュアシュナウザーとある。見ると云われて見ただけなのに、いつのまにかこの犬を買わなければいけない空気になった。

その週末、街の外れの小さなペットショップに出かけた。冷やかし半分で犬用ケージをのぞくと、あまり冴えない感じの雌の仔犬が不貞腐れたように寝そべっている。犬種はミニチュアシュナウザー、生後2〜3ヶ月だったから、まだ小さくて、黒くて、どうみても大きめのネズミという印象だった。雑誌に載っていた写真とはずいぶんと違う。

顔を近づけて覗き込んでも、別に尻尾を振るわけでもなく、愛嬌をふりまくわけでもなく、不機嫌この上ない。声をかけても、

「何だ、このおっさん……」

と云った風情で上目づかいに見上げる。目つきも良くない。あまり掃除の行き届いていないゲージの扉には15万の商札が付いている。ずいぶん高い。

隣のゲージと同じ犬種の雄犬がいた。横を向くと目が合った。こちらは闊達で元気が良く、覗き込むと短い尻尾を振って寄ってくる。人懐っこくて、愛嬌があつて可愛い。見ている方も自然に頬が緩む。

その風貌もミニチュアシュナウザーらしくて気に入った。運命の強い力を感じ、ボク達は出会うべくして出会ったのだと思ひ、すっかりその気になった。ケージの扉に掛かる商札に値段だか月齢だかの表示がなかったから店員に聞いてみようと顔を上げた瞬間、その仔犬が水飲みをひっくり返した。

水がいったいに入った入れ物を派手にひっくり返したものだからゲージの床に敷いてある新聞紙は一面びしょ濡れで、その上を転げまわる仔犬もずぶ濡れ、おまけに、当の張本人がひっくり返った水飲みを啜えて振り回すものだから濡れた新聞紙はぐちゃぐちゃで、

ついさつきまで小ぎれいだったゲージの中は惨憺たる有様になった。仔犬はその濡れた新聞紙の残骸の上に屈み、そして、シャーッと音を立てて小便をした。

その有様をただ茫然と見ていたボクは、ふと、新築したばかりの我家と、最近買いそろえたばかりの家具が小ぎれいに収まった居間と寝室を思い浮かべ、あの清潔で端整な居住空間をわがもの顔で走り回り、齧り、小便を垂れ流すこの小動物の姿を思い浮かべた。運命的な出会いの感動は消えていた。

最初見たケージに視線を戻すと大きめのネズミが見上げている。愛嬌はないが大人しい。闊達さはないが新品の家具を片っ端から齧るようなことはなさそうだ。元気が良いとは思わないが部屋中に大小便を垂れ流すようには見えない。あまり人懐っこくもないが何といつてもミニチュアシュナウザーだ。取りあえず、消去法でいくとこの犬になる。

この客はカモと思ったか、絶妙のタイミングで店員が寄って来た。冷やかしのつもりで値切ってみた。12万と指し値をしたら、あっさり値引きしたので後に引けなくなった。あとは成り行きだった。かくして、無愛想なミニチュアシュナウザーは我家のペットとなった。

\*

仔犬と一緒に仔犬用のコンテナ、餌入れと水入れ、仔犬用の餌と、その他諸々を買いそろえ、そのコンテナの底に新聞紙を敷いて丁寧に運んだ。

家に帰るとあらかじめ用意してあった大きめの籠にタオルケットとクッションを敷き、取りあえずはそこで小便や糞をしてもいいように古新聞紙を敷いた。

しばらくは借りてきた猫のように大人しかったネズミはボクらが慌てて餌入れと水入れを準備したところで籠から出てきて、前足を揃えて背伸びしながら大きくアクビをする。と辺りを見回し、おもむろにその場にしゃがみ込んでシャーッと小便をした。

どうやら可愛いのが可愛くないのと浮かれている場合ではないらしい。まずはトイレの場所を憶えさせなければいけない。忙しくなった。慌てて新聞紙と仔犬用のトイレシートを居間の隅に敷き、夫婦交代でジッと見ていて、仔犬がもよおした素振りを見せると抱え上げ、シートの上に乗せる。

しかし、用を足そうとするたびに突然抱え上げられる当人は、その生理的欲求を中断させられる苛立たしさからか、それとも、そこで小便をしてはいけないものでも思い込んで

でいるのか、シートの上ではちびりとも漏らさない。おだててもすかしてもそこではしよ  
うとしないのだ。

苛立つても仕方がないからこちらも根比べと覚悟を決めて粘るのだが、こちらが見てる  
間はその気配も見せないのに、ふっと気を緩めて目を離れた途端に部屋の隅にシャツと  
やる。

15万の正価を12万に値切られたのが気に入らないのか、ネズミと呼ばれたことに機  
嫌を損ねたのか、それとも、トイレシートの上では金輪際小便などしまいと硬く誓いを立  
てているのか、したくなると、何故かトイレシートや新聞紙を避けてする。

結局、我家の居間の床はトイレシートと新聞紙に覆われ、敷き詰めた紙とシートを踏ま  
ずに歩くのが難しい状況に立ち至ったのだが、敵は何かその間隙を探し当て、張ったば  
かりのフローリングめがけてシャツとやる。とにかく目が離せない。

\*

ペットを飼えば当然我家の一員ということになり、我家の一員ということになればいつ  
でも一緒というスタイルになる。だいたい、家内がベツタリで離れようとしないうけだか  
ら、当然、何処に行くにも連れていくことになり、翌日はその流れで初のドライブという  
ことになった。

家でもまだトイレが出来ない状態だから、取りあえず、どこで漏らしてもいいように愛  
車の床に新聞紙とトイレシートを敷き詰め、仔犬だから車酔いもするだろうと安全運転を  
心掛ける。そろそろと発進し、信号機に掛かるとそろそろと止まる。決して急ブレーキは  
かけない。仔犬は助手席に座る家内の膝の上で取りあえずは大人しい。

迷惑運転で逮捕されそうな速度でトロトロ走っていると、わが愛犬は家から2キロほど  
のところまで小便を漏らした。膝を濡らした家内が悲鳴を上げる。慌てて路肩に寄って車を  
止め、濡れたシートとジーパンを拭い、

「まあ、仔犬だからしょうがないよ……」

などと鷹揚なことを云いながら走り出し、後続の車からクラクションを鳴らされそうな  
速度でまた2キロほど走ると、今度はゆるい糞をした。

今回は、怪しげな気配を察した家内が素早く床の新聞紙の上に仔犬を置いたので、膝や  
シートを汚すことはなかったものの仔犬特有の下痢便だからひどく臭う。

家内は再び慌てふためき、車は再び急停車し、ボクは流石に不機嫌になった。実際、あまり鷹揚なことも云ってられない。これではいつまでたっても目的地に着かないではないか……。

数日前に洗車したばかりの、それも通常のワックス洗車に車内清掃のオプションを追加した清潔な車内には糞尿の臭いが漂い、普通に息をしようと思えば窓を開けずにはいられない。

何となく気まずい雰囲気になり、しかし、その場は気を取り直して糞尿に濡れたシートと新聞紙を片付け、車は再び走り出した。仔犬は、しかし、初めてのドライブで車酔いしたのか、また2キロほど走ったところでゲツと吐いた。結局、その日は外出を諦めた。

\*

夜は夫婦2人の寝室にベビーベッドを用意した。初めはそのベッドに寝るのだが、夜中になると寂しいのか家内のベッドにもぐりこむ。最初の夜はボクのベッドに来たのだが、ボクが寝返りを打った拍子に押しつぶしたらしい。

夜中のことなので、寝返りを打った当人はよく憶えていないのだが、何れにしても、仔犬はこの飼い主に弱者の生命財産を守るデリカシーはないと判断したらしく、以来こちらの布団には来なくなった。

我家に来てから2〜3日すると名前も「ネズミ」ではまずかろうということになった。取りあえずは新しい家族なのだから、家長としてはそれなりの名前を考えなければならぬのだが、どうにも思いつかない。

コロとか、太郎とか、次郎とか、いや、メスだから花子とか、いろいろ考えるのだが、どれも垢ぬけない。結局、一字の名前にすることにして、面倒くさいから50音順に探すことにした。

この場合、50音を「あいうえお」順に追っていくのだが、「あー」、ではおかしい、「いー」でも名前らしくない、「うー」でも変だし、「えー」ではもつと変だ、そんな具合でなかなか決まらない。

「あかさたな」を根気よく追ってみたがどうもピンとこないの、今度は50音に濁点をつける、やがて、は行の「びー」にいきあたり、そのあたりで疲れた。結局、それ以上考えるのも面倒くさくなり、「びー」でいいだろうというほぼ投げやりな結論に達した。

その間、何も云わずジツともの思いにふけるボクの様子を見ていた家内は、こちらが深い哲学的思索に耽っているものと解釈したらしく、その思索の結果出てきた「びー」を深い形而上の意味を持つ単語と理解した様子で、しきりと、

「それ何の意味なの……」  
と聞きたがる。

当方としては、別に意味はないと云うわけにもいかず、その「びー」「びー」なる単語に形而上の意味を持たせることのほうに名前を考える倍の時間を費やしたのだが、結局、行き当たりばつたりの思い付きで「びー」「びー」はミツバチの「Bee」だと説明するとうまく納得して一件落着となり、かくして、我家の犬はめでたく「ほさかびー」と命名された。

\*

しばらくすると朝晩の散歩が日課になった。日に2〜3回散歩に出る習慣がつくとトイレも家の外でできるようになり、結局、あれだけ頑固に拒んできたトイレシートや新聞紙を巡るバトルはそれをもって平和裏に終息した。

近所の人に聞いた話ではボクラ夫婦の住むこの地域は全国でも飛び抜けて飼い犬の多い地域らしく、犬口密度、つまり、この辺りに住む人の数に対する犬の頭数の比率は全国で最も多いという不思議な土地柄らしい。

そんな土地柄もあってか、犬のリードを握る愛犬家達があちこちに出没し始める朝晩の散歩時、この界限の住宅街を巡る路地は犬を連れた人たちの専用道路と化し、犬を連れていない通行人は肩身の狭い思いをすることになる。

それどころか人相によっては何故か怪しい目で見られたりもするから、犬嫌いの人はこの街ではずいぶんと暮らしにくいだろうなどと秘かに同情したりもするのだが、その反面、ここではその性格に多少の欠陥があっても犬を連れているだけで一応まともな人間に見られる傾向があるから、ボクなどは大いに助かる。

朝晩犬の散歩に出るようになると知り合いも出来る。びーのおかげで越してきたばかりのボクラにもずいぶんと顔見知りが増えた。所謂、ご近所の犬友達ということになるのだが、この場合の主役は犬だから、大抵の場合、だれだれのお父さん、だれだれのお母さんといった呼び方になる。

例えば、ジャックのパパ、コロちゃんのママ、マロンのお母さん、ジュリアのお父さんといった具合で、そうなる、たまたま一人で歩いているときに知り合いとすれ違っても向こうは判らない。

彼らの知っている「ほさかさん」は我家の犬とワンセットであつて、つまり、ミニチュアシユナウザーのビーちゃんと一緒だからこそ「ビーちゃんのお父さん」として成り立つわけであつて、犬抜きのボクではたまたますれちがつた何処かのおじさんと認識されるだけのようだ。

だから、我家の犬が同行していないときにたまたまご近所の犬友達とすれ違ふときは、「こんにちは……」  
のあとに必ず、

「ボクは、ほら、二丁目のビーの飼い主の……、」  
といった挨拶、プラス、犬の解説付き自己紹介が必要となる。

そんなわけで、散歩の途中で行き合う知り合いに対し、毎回毎回、自分が何者であるかをいちいち説明する手間を省くためにも、この街を歩くときには必ずビーが同行することが望ましい。

\*

朝晩の散歩を始めてしばらくすると、すれ違ふ犬と飼い主の見逃せない特徴に気付く。それは例えば、ルックス的にはかなり問題がある犬でも、飼い主は皆自分の犬が世界中で一番可愛いと確信しているらしいことで、これは、どの飼い主にも共通の症状として、まず例外は認められない。

それと、どういうわけか飼い犬は飼い主に似る。散歩の途中、小太りで丸顔のブルドックを連れてくる小太りで丸顔のおばちゃんや、細面で鼻のしゃくれたキツネ顔の柴犬を連れるキツネ顔のおじちゃんに遭遇する、ついで頬が緩み、鼻が上を向いたシーズーを連れる飼い主の鼻が同じ角度で上を向いたりすると、ふつと犬が飼い主に似るのか、それとも、飼い主が犬に似るのだろうか、といった深遠な哲学的命題に心を奪われたりもするのだ。

だいたい顔や体形がそっくりなのだが、あれは、多分、性格も似ているのだらうと思ふ。だから、人の顔を見るとキャンキャンやたら吠えかかるやかましい犬や、妙に攻撃的

な犬や、嘔み癖などのある犬などに会うと、つい、その犬の飼い主とは距離を置いた方がよからうなどと思ってしまう。

そして、その決心は、その飼い主がどんなに若い美人であろうと、ファッションモデル並みにスタイルが良からうと揺るがない。

そう考えると、近頃は我家の犬もボクに似てきた。誇り高いミニチュアシュナウザーの純血種であることを差し引いても、その哲学者然とした知的な風貌や、頑固な孤立主義者であることや、思いやりの深い優しい性格は間違いなくボクに似た。

ただ、この犬がよく鳴く。知的で物静かなボクに似ずよく吠えるのだ。この騒々しさはどうみても家内のほうに似た。とにかく、喧しく吠えることがおのれの天分と心得ているらしく、家の中でも外でも事あるごとに吠えたり、唸ったり、忙しい。

あの甲高くてよく通る特徴的な声は数百メートル離れたところからでもよく聞こえるから、家内と散歩や買い物に出た時などはだいぶ離れたところからでも我家の犬が帰ったとわかる。だから、家内の車がまだ玄関脇の駐車場に入る前から騒ぎ立てるその声は書斎で書き物をしているボクに山の神の帰宅を知らせる警報器代わりにもなっている。

\*

しかし、そのけたたましさを差っ引いてもその並外れた利発さは認めざるを得ない。我家の犬ながら実に賢いのだ。

それは、ホモサピエンスとしてほぼ平均的な知能指数を有するボクが舌を巻くほどで、朝晩の散歩をするようになってからは決して家の中で粗相をしないと、教えたわけでもないのにテーブルの上の食べ物に決して口をつけないとか、散歩から帰ったら足を拭くまで居間に上がらないとか、そうした日常的な事柄は勿論のこと……。

例えば、我家の犬には自分の玩具箱があつて、家内やボクと遊ぶときはその玩具箱の中から玩具を出し、飽きると遊んでいた玩具を別の玩具に代えるのだが、誰が教えたわけでもないのに、今まで遊んでいた玩具をきちんと玩具箱に戻してから次の玩具を持つてくるところなどは実に几帳面で、とても犬風情のしわざとは思えない。

朝の散歩に出る時も、ボクがゴミ袋を抱えただけで、何も云わなくてもゴミ置き場に直行し、ボクがゴミを出したことを確認するとおもむろにいつもの散歩コースを辿りはじめるとか、とにかく、一時が万事そんな調子で、その底知れぬ賢さはどこか犬ばなれしたも

のがあるのだ。

しかし、手はかかる。ざっと考えても、散歩が日に3度、雨の日も風の日も台風が来ても休めない。散歩が終われば丁寧に足を洗い口と尻を拭く。雨に濡れた日はシャンプーとドライヤーが要る。

食事は日に2回、水替え、おやつ、サプリメント、週に一度のシャンプーとドライヤー、飼い主は犬の身の回りの世話に追われて、どっちが飼っているのか飼われているのかよくわからない。

月に一度のトリミング、ワクチン接種、ダニやノミ予防の処置、ちよつと体調が悪かったり、何かの拍子に悪いものを食べたり、腫れものや怪我や虫や蜂に刺されても動物病院に車で走るから出費もかさむ。

結果、精密検査を要したり、入院して一晩様子を見ましようなどということになるとこれもけっこう高くつく。しかし、その並々ならぬ手間や出費を差っ引いてもびーの持つ癒しの力は素直に認めざるを得ない。

大方の犬がそうであるように、我家の犬も飼い主に対して心優しい。犬種の性質からいってもミニチュアシュナウザーの細やかな感性は超癒し系とっていいだろう。

日常の何気ないやり取りの中で、心ない家内の一言に大いに傷ついたボクが、内心、ムツとしているときなど、いつの間にかスツと寄ってきて鼻先をボクの顔に寄せ、クンクンと鳴いて親愛の情を示すのだが、それはまるで、

「まあまあ、おとうさん、ここはひとつ機嫌を直して、ね、ことを荒立てず、穏やかに、穏やかにね……」

と云っている風に思えるし、実際、そんな思念も伝わってくるのだ。

しかし、許せぬ一言を吐いた家内のほうはボクと犬のそんな高度な思念のやり取りなど露知らず、ついさっきの悪口雑言などすっかりと忘れた風に鼻歌など歌いながらキッチンに立っているから、既に主導権を握られて幾歳月、この殺伐とした我家で味方はやはりこの犬だけかと思ひ、そう思うと何か寂しいような、しかし、どこか救われたような気分になるのだが……。

とにかく、我家の犬はそんなこんなも含めて何もかも判っているふうで、そんな仕草のひとつひとつにときどき薄気味悪ささえ覚えるほど犬並みはずれた理解力を示すのだ。

散歩のときはノーリードで歩く、首輪からリードを放しても決してボクから一定の距離以上離れようとしなさい。車の通る大通りでは危ないのでリードをつなぐが、強くひかなくても声を掛ければ云う事をよく聞く。

だいたいボクはリードが好きでない。狭い庭で短いリードに繋がれて囚人のような扱いを受けている犬や、短いリードを握る飼い主の云うがまま窮屈に歩く犬たちを見ると良い気持ちがない。

人と人、人と物の関係は互いを縛ることで成り立っているように思う。人は何かに縛られて生きているのだろうとも思う。そのリードは目に見えないが、結局は皆そのリードに引かれるままに歩いているのだと感ずることが多い。それは、生きているというより生かされているという感覚に近いのかもしれない。

だから、せめて自分の犬は、それも、散歩のときくらいはノーリードで歩かせてやりたいたいという気にもなるのだが、実際はノーリードで歩ける犬は少ない。ましてや、訓練なしのノーリードとなると珍しい。

そんなに賢く利発な犬も外に出たときの社交性はひどく心もとない。夫婦二人の家で子供同然に扱われているせいか自分が犬という自覚が無いようなのだ。行動の端々に、どうも自分を犬と思っていない形跡があつて、他の犬とは金輪際馴染もうとしない。公園で他の犬たちと会ったときなどは、

「あつ、犬が遊んでる……」

と云つた風情で、一匹だけ離れたところでポツンとクールに見つめている。他の犬が遊んでいるのを他人事のように見ているだけでその輪の中に入ろうとしないのだ。

何かの拍子で犬の群れの中に紛れ込んでも、他の犬に交じってどうしていいのかわからないらしく、小さい子供が保護者に救いを求めるようにボクや家内に寄り添い、ボクらの足を前足で引っ掻いて、

「ねえ、早く帰ろうよ……」

と訴える。

しかし、人が来たらよく吠える。郵便屋さんや宅急便の配達などには喰つてかかるように吠え、大切な客や友人にも遠慮なく吠えかかる。

客や友人の場合は吠えながら微妙に尻尾を振っているから、敵意はなくて警戒心も薄いのだろうが、とにかくけたたましくて、一旦吠えはじめると鳴きやまず、互いの話声もテ

レビの音も電話の声も聞こえなくなるほどやかましい。

知り合いの家を訪ねると、いっこうに可愛くない犬が出てきてきたましく吠える。あまり理不尽に吠えるのとやかましいので思い切り蹴飛ばしたくなるが、まさか飼い主の目の前で蹴飛ばすわけにもいかず、抗いがたい本能的欲望を必死に抑えながら、目の前に座る飼い主の手前お犬様のご機嫌をとる。

誰しも一度や二度はそんな経験があると思うが、我家の訪問客には例外なくそうした経験を積んでいただくことになっている。

\*

週に1度は必ず来る友人がいる。ここ数年、ボクら夫婦は自宅から1時間ほど離れた会場の週一度の瞑想会に参加しているのだが、毎週日曜日にはやはりその瞑想会に参加している友人が家まで来て会場まで乗り合わせて行くのが習慣になっている。

我家の犬はこの友人にも吠える。それも尋常でない吠え方をする。異常な勢いで吠えかかるのだ。

その友人は自分でも甲斐犬を飼っている。別に犬嫌いというわけでもなく、動物虐待をしているわけでもなく、特に悪人とも思えないのだが、その吠えかたのあまりの激しさとけたたましさに、最初のころは穏やかに機嫌をとっていた友人も、その温厚な人柄に似合わず、

「いいかげんにしてくれよ、もう、ここに来て2年になるんだぜ……」

と声を荒らげた。

友人の可愛がっている犬だからその飼い主の目の前で本気で叱るわけにもいかない。ボクなら飼い主がどっかに行った隙に蹴飛ばすくらいのことではしかねないほどけたたましいのだが、彼は動物にはいたって優しい男で、そういうことのできるタイプではない。

大人しく博愛精神に富んだその友人にしてみれば、それは我慢に我慢を重ねた上の精一杯の抗議だったのだろうが、とにかく、飼い主のボクが腹にすえかねる彼の気持ちもよく判ると納得するほどその吠えかたは凄まじい。

\*

知り合いに犬語を解する霊能者がいる。普段は人相手の霊視をしている彼は犬語が苦手だと云うが、相手が動物でも思念を読みながらのコミュニケーションは出来るらしい。我家へは毎週日曜日に訪ねてくる例の友人と連れだつて来ることが多く、だから、我家の犬はこの男にもよく吠える。例のごとくけたたましく吠える。

あまりいつまでも吠えるので流石に閉口した霊能者は、我家の犬の前足を膝に置くと額を寄せて思念のやりとりを始め、しばらくするとその訴えを通訳し始めた。

その彼の説明によると、どうやら、

「お父さんとお母さんを連れて行かないで」

と訴えているというのだ。

「家に誰もいなくなってしまうのはイヤだ」

という意味のことを云っているらしい。

それで判った。例の友人が訪ねてくる日は皆でお茶を飲み、ボクと家内とその友人の3人は連れだつて瞑想会に出掛ける。その後はかなり長時間留守にするから、その間ひとり取り残される我家の犬はひどく寂しい思いをするに違いない。

だから、我家の犬にしてみると、週に一回訪ねてくる例の友人は来るたびにボクと家内を理不尽に連れ去る悪魔のような存在なのだろう。そう考えると、彼が姿を見せると仇敵のように激しく吠えかかるのもよくわかる。

ボクは、今まであまり注意していなかった犬のひとつひとつの鳴き声にひとつひとつの意味があるのかと驚き、以来、その鳴き声に敏感になった。確かに、そう考えると同じ鳴き声でも一声一声抑揚と強弱が違うのだ。

\*

あまり人には云えないことだが、家内が実家に帰ったときの数日間ボクと我家の犬だけで留守居をしたことがあった。その時、何かで我家の犬がちよつと機嫌を損ねるようなことがあって、流石に気がとがめたボクは、

「愛してるよ……」

と云った。家内にはこんなセリフは間違つても云えない。もし、云おうものなら、

「熱でもあるんじゃないの……」

と本気で心配されかねないセリフなのだが、犬になら云える。それと、その時は何故か

云っておかなければいけない気がしたのだ。だから2度云った。

最初、我家の犬はキョトンとして、ボクの目をまっすぐ覗き込むように見ていたのだが、もう一度、

「おとうさんはお前を愛してるんだよ……」

と繰り返すと、その小さな身体をすり寄せるようにして親愛の情を表わす。わかっているんだな、と、その時理解した。

確かに我家の犬は人語を解する。つまり、こちらの云うことを理解する。それも、ほぼ完璧に理解するから人の話が聞けない症候群の人や中途半端な人間に語りかけるよりはずっと解りがいい。

一方の犬語はコツさえ掴んでしまえばそれほど難しくくない。犬語といっても我家の犬が話す犬語であるから語彙や言い回しは人語と似ている。語彙も発音パターンも人語よりかなり少なくて単純だから、ボク的にはむしろ最近勉強を始めたサンスクリット語よりははるかに易しい。

犬語を話すとき、我家の犬は一声「ヴウー」と唸ったあと、喉と喉の奥と唇を動かして「クニャクニャクニャ」と何か云う。人語を解する我家の犬はこちらも犬語を解すると思っているから話し始めると止まらない。それを、鳴いたり吠えたりしているわけではなくて話なのだと思つて聞くとなかなか饒舌なのだ。

最初はわけが判らなかつたボクも、やがて、多少の犬語を解するようになり、喉と唇の使い方を憶えてからは時々犬語で話すようにもなつた。

発音はいささかおぼつかないが、喉の奥を震わせて「ヴウウー、クニャクニャクニャ」と真似ると何とか通じる。通じないときは意識を集中して相手の思念を読み、こちらの思念を伝えることで補う。

かくして、ボクも我家の犬も今や二ヶ国語を操るバイリンガルとなつたわけだが、この恐るべき才能により始まつたボクらの会話は、しかし、あっち飛びこっち飛びでさっぱり要領を得ない。

その気まぐれで掴みよのない内容から察する限り、どうやら犬はあまり難しいことを考えないらしく、だから、話の趣旨は飲み食いに関するものが殆どで、それは、

「何か食べるものないの……」

とか、

「何かちよーだい……」

とか、

「もつとちよーだい……」

といったものから始まる。話はシンプルで判りやすい。

普段は犬並みはズレて利口なようでもやはり犬だからあまり深くはものを考えない。だから、あまり難しいことも云わない。まあ、こちらもあまり難しいことを考えるタイプの人間ではないからこの展開に不服は無いのだが……、

兎にも角にも、ボクとびーの会話はそんな風にして始まり、やがて、

「なにになにして遊ぼうよ……」

とか、

「そろそろ散歩に行こうよ……」

とか、

「どこかに連れてって……」

といった具合に展開していく。

ありていに云うと、人と犬のあいだには食べ物と、遊びと、待遇改善要求以外にあまり実のある話は無いわけで、しかし、人さまと人さまの話す話題がそれほど知的で高尚なものというところがかなり疑問であって、だから、あまり噛み合っているとはいえないやりとりであっても、まあ、嘘や噂話や陰口がないだけ始末が良いようにも思うのだが……。

そんなこんなしているうちにおやつとの時間になる。犬並み外れて利発なようでもやはり犬だから、食い物のこととなるとどこかさもしい。インテリ然と会話を楽しんでいた我家の犬は、突然、ただの犬に戻って、

「お腹減った……」

とか、

「食べるものないの……」

しか云わなくなる。たまに何か云っても、せいぜい、

「野菜味より魚味のほうが好きだ……」

程度のこと、あとは前足でこちらの膝を引っ搔くなり、膝の上に乗るなりといった要求貫徹のための実行使となる。

そんなこんなしているうちにやがて散歩の時間になり、散歩が終われば食事の時間になり、と、まあそんな具合で、会話はだからなかなか前に進まない。いつも、同じところを行ったり来たりする。

犬としての自覚に些か欠けていて、だから、家の中では全く警戒心を見せない我家の犬も家の外に対しては一応の警戒心が働くのか、家の前を誰かが通ったりしたときには、突然、番犬としての本能が甦ったように、

「今、怪しげな人が家の前を通ったよ、ワンワン」

とか、

「郵便屋さんが来た、ワンワン」

などと騒ぎ立て、やがて、それはエスカレートして、

「寄るな！、来るな！、入るな！、ギャンギャン、ギャンギャン」

などと派手な警告を発することになるのだが、それも、無害な相手にただ大袈裟に騒いでいるだけといった感じで、番犬としての実用性には些か問題があるようにも思える。

しかし、我々の会話はそんな具合に日々友好的ムードで推移し、日を追うにつれて長くなり、特に、近頃は比較的知的レベルの高い会話をかわすようにもなったのだが、その内容は、しかし、我家の平和的家庭内環境維持に深刻な影響を与えかねないのでここには書けない。だいたい書いても長くなる。

ビーは出好きで、車に乗るのが大好きだ。気が向くと車で30分ほどの場所にあるショッピングモールに連れだつて出掛ける。ショッピングモールには軟質小麦が原料のイタリアンビスケットを売っている。ペットショップがある。

口に入るものなら大抵は好物になるのだが、イタリア製でバニラの香りのするそのビスケットは特にビーの好物で、少しずつ与えても1袋100グラム入りのそれはほぼ1週間でなくなる。

ペットショップの向かいにはアメリカンスタイルのコーヒーショップがある。セルフサービスで座席の半分は外のテラスにあるから犬も座れる。

我家の犬は、一旦、この店の椅子に座ると微動だにしない。人が話しかけても、犬が通りかかっても全く動じない。ボクが席を立つても、水を取りに行っても、トイレに行っても、東京のどこかの駅にある忠犬ハチ公の像のようにただじっと待っている。

ボクたちはそこで柔らかい春の陽を浴び、眩しい夏の陽光に照らされ、清涼な秋の風に吹かれ、穏やかな冬の陽にホッと息をつく。ボクは冷めかけたコーヒーをちびりちびり飲み、ビーは冷めたミルクティーに口をつける。ボクたちの時間はそんな風にして過ぎていく。

我家の犬はメスということもあるのだろうが、おとなしくて素直で人の心情がよくわか

る。それと、勝手に吠えまくるわりには聞き上手でもあって、どんなことを話しても、人の話をジツと聞きながら、一生懸命にそれを理解しようとする。

どこまで理解しているのかわからないこともあるのだが、こちらが何か云っているときに、その真摯な目でジツと見つめられると何か心の中まで見透かされているようで、日々どこかやましい心根で生きるこの身としては身の置き所のない気分させられることがよくある。

そんなときはどうにも居心地が悪いのだが、しかし、もの云わぬときのその目に果てしない許容と献身の力を感じたりもするのだ。犬を愛する多くの人々と同じようにボクもその不思議な心の交流に惹かれているのだと思う。

\*

今は遠い記憶の断片として心の隅に残るあの日、街外れの小さなペットショップでひとりボクたちを待っていたあの無愛想なネズミは、やがて、ボク達にとってかけがえのない存在になった。

そのネズミはやがて古い、最近では居眠りが多くなり、あまり喋らなくなった。眠るでもなく起きるでもなく一日ウトウトしている。浅い眠りから覚めるとふと目をあけ、そこに家族の姿を認めると安心したようにまた目を瞑る。そして、またウトウトが始まる。ウトウト、ウトウト、ウトウト……

びーは、そんな穏やかな暮らしが続いたある秋の日の朝、そのウトウトから目覚めないうまま永眠した。享年16歳だった。静かな最期だった。

確か、この街に越してきた年に飼い始めたから、ボクらがこの街に住み始めてもう16年が経ったことになる。結局、びーのほうが一足先に逝ったわけだが、ボクが逝くときは三途の川のこちら側の川岸まで迎えに来てくれることになっている。

つまり、ボクらはそういう約束をしている。約束は、勿論、犬語で交わした。